

## § 2.9 教育研究会の活動記録

弓削 耕（元幹事）

### 1. 発足のころ

教育研究会は SCE・Net の中では若い方の研究会であるが、それでも、2009 年 10 月で 52 回の開催回数を重ねている。

SCE・Net には当初、安全、エネルギー、環境、材料の各研究会があった。いずれも各分野の技術者にとって重要な課題であり、共通の認識を持って議論し得るものである。この他に教育問題も、技術者として、国民として共通的に関心を持てる課題であり、研究会として取上げて見たいと思っていた。加えて、SCE・Net の活性化の一助となるのではないかと考え、遅ればせながら 2004 年に発足することとした。

教育問題は化学工学の分野は言うまでもなく、現在の日本にとって重要な課題であり、多くの問題を抱えている。この課題に会員各位の経験を踏まえ、叡智を絞り、教育の改善・推進に貢献できれば極めて有意義である。このように考え、研究会を結成した。

SCE・Net の活動指針に則り、『「技術伝承」の分野で「技術者の教育・人材育成への協力」、「生涯教育への協力」、「技術資料の作成」を行ない、「自主研究」の領域から始め、「講演・執筆」の領域から「コンサルティング」の領域へと活動の輪を広げて行く』というのを研究会の方針とした。

この方針のもとに、幼稚園から大学、社会人までの段階について、教育制度、教育内容などを対象に、身近な問題から研究を進めていくことで研究会を始めた。

### 2. 場の提供

丁度、その折に、お茶の水女子大学の公開講座（再教育講座）の方から、SCE・Net への参画が求められ、SCE・Net としては、これに賛同し、積極的に参加、支援していくことが決められた。かかる講座への参加は SCE・Net としても初めての経験であり、理想の高い講座を支えて行くにはかなりの労力を割かねばならないことが予想された。

そこで、折りよく発足しつつあった教育研究会を、その講座を計画、運営する場にして欲しいとの SCE・Net 幹事会の要請があった。教育研究会としては、ある程度の研究を重ねた上で、その成果を結実させる手段として、社会人市民講座などができれば好ましいと考えていた。しかし、社会人市民講座などを実施できる機会もそう多くはないので、研究会の進め方としては順序が逆になるが、この機会を生かし、公開講座への参加に協力することになり、研究会の場を提供することとした。

公開講座は環境、エネルギー、プロセス、安全の 4 分野で、主催者側の拡大路線に合わせて 105 項目の大規模講座の計画になった。プログラムの作成から、適任講師の選択、資料の作成、講義の進め方まで、準備内容は多岐にわたった。そして研究会への参加者も講師を中心に 30 人を超す盛況であった。講座には 2005 年度から参加する予定であったので、2004 年の初年度の研究会は全て講座の準備に当てざるを得ず、不本意ながら教育研究会は全く公開講座準備会になってしまった。

2005 年に講座が開講されても、運営諸問題の解決、講座の反省と改善のために研究会の殆どの

時間がとられ、本来の活動はできなかった。残念ながら 2006 年度までは、この状態が続いたが、講座が軌道に乗り出すと、講座に参加するだけの目的で当研究会に出席していた人は当然のように研究会には顔を出さなくなった。そこで、2007 年からは本来の教育研究会の活動に戻すべく、改めて設立の趣旨に賛同して参加できる人の意志を確認し、強固な意志で研究会に参画できる人だけで研究会を進めていくこととした。その間でも、公開講座の運営が円滑に行くようにとの若干の配慮はしていた。2007 年後半からは、SCE・Net も公開講座の主催者と運営面で齟齬を来すようになり、公開講座は本研究会の手を離れることになった。ここで初めて、教育研究会とは公開講座支援の会と思い込まれていた誤解を漸く払拭できたようだ。

公開講座の計画、運営に研究会の場を提供したことで、公開講座を成功させ、また SCE・Net を活性化させた。この経験は、以後に SCE・Net が関係した会外の教育講座活動の展開には役立った。この点については、いろいろと経緯はあったが公開講座に関係された方々の労には感謝したい。

### 3. 改めての発足と活動

この時期から、本研究会は設立当初の趣旨を生かしての運営ができるようになり、教育研究会のメンバーも当初の趣旨に賛同される方のみとなり、明確な目的を持った会として進めて行くことができるようになった。

当初は、全員の意識を教育に向けるために、日本の教育の歴史の研究からはじめ、メンバーの関心の強い化学工学教育の歴史と大学における化学工学教育の現状についての調査を行い、意見交換を行った。

折りしも、当時の内閣が教育問題に力を入れ、教育基本法の改正に着手し、いろいろと議論が行なわれていたので、教育基本法についての研究をし、遡って明治以来の教育勅語中心の教育について振り返って見た。また、国際的に見て、日本の教育が劣ってきているのではないかと懸念から、諸外国の教育制度についても調べてみた。

しかし研究会再発足の当初は、調査・研究成果の報告者が一部のメンバーに偏っていたので、メンバー全員が調査研究し、その成果を研究会で話題として提供できるように、毎回 1 人 1 議題で順番に報告するようにした。このことにより、メンバーの参画意識も高まり、かつ幅広いテーマについて討議が行なえるようになった。

これまでに話題となった主なことを列挙してみると、

- ・ 日本の教育の流れ（古代から現代までの略史、世界の教育状況との比較）
- ・ 教育基本法（新旧の比較、教育再生会議の活動）
- ・ 産業技術教育史（明治以降、旧制高工の歴史）
- ・ 環境教育
- ・ 日本の化学工学教育（歴史と現在の教育内容）
- ・ 半導体素子ポリイミド技術開発。化学産業における技術革新の典型例
- ・ 天然ゴムの開発史
- ・ 大学院教育の変遷

- ・ 明治の技術教育
- ・ 小中学生への理科教育活動実施報告
- ・ 靖国問題
- ・ 日本における医療教育、医学教育
- ・ 後期高齢者医療制度（長寿医療制度）
- ・ 工学系インターンシップ
- ・ 「国家の品格」について考える。どうなる学校
- ・ 化学物質リスク管理者教育。戦後世代の企業人のモラル低下と教育問題
- ・ 会津の土風と教育。勝海舟の教育論と福沢諭吉
- ・ 教育委員会
- ・ 極貧国で頑張るシニア
- ・ 東京工業大学化学工学科の歴史
- ・ 開国 150 年と日本の教育
- ・ 教科書・国語読本の変遷、明治以来の教科書を知る
- ・ 首都圏工業高校（化学系学科）の現状と化学工学教育
- ・ 新しい技術開発（経験談）
- ・ 教育勅語、終戦の詔勅
- ・ 選挙マニフェストに見る教育問題
- ・ 同和教育
- ・ 道徳教育
- ・ 日本の産業と科学技術立国

のように、広い分野を対象に、多岐に亘っている。研究会に参加することで、教育などに関する幅広い知識が得られ、討議を通じて自己の考えを深めることが出来る。ともすると、自己の利益に関することばかりに目が行く社会において、教育問題を中心に広く社会の問題について考える場を提供する研究会となっている。

これらのテーマを毎月 1 回 1 テーマを基準に報告、討議をしている。研究会の結果については、毎月、SCE・Net ホームページの「教育研究会の動き」という欄に掲載し、SCE・Net 会員には報告、PR をしてきている。

研究の成果については、残念ながら、まだ大きな流れ、小さな社会活動につながるまでには至っていない。一部の報告については、SCE・Net ホームページの一般者向けの「教育研究会」欄に掲載している。中には若干の反響のあるものも見られている。外部に発表するには、内容的にも批判にも耐えられるものでなくてはならず、また反論・意見の多いこの時代において見えにくい相手にも対峙できる心構えが必要であり、これらに対応する余裕がないと難しい。このため、思想的な面が強い問題については、適切に報告できない悩みがある。

その他、工業調査会の「化学装置」誌から、技術伝承についての連載執筆を依頼され、メンバーの 1 人が中心になり、計画をまとめ、広く SCE・Net 会員に執筆を募集した。その結果、多数の応募があり、

「化学装置」誌の 2009 年 10 月まで 1 年余にわたり、「シニアエンジニアが伝授する技術と技能」として連載された。

#### 4. これからの動き

教育問題は国の根幹となるものであり、教育の基本方針や実施方法は国民の合意で決めるべきものである。そして、一旦決めたものは安易に変ええるべきではない。教育の成果が現われるには 10 年、20 年の長期間が必要であるからである。しかし、時代とともに、さらに将来を見ずえて変革していくべきものであることも認識しておかねばならない。教育問題については常に種々の議論があるのも事実である。

この中で本研究会もシニアの議論を活発に継続し、そこから具体的な提案、活動に結びつけばよいと考えている。何かというと、全てを金儲けにつなげたい、金儲け至上主義の世の中であって、このような会で目先のことに深く囚われず、日本の現在、将来を掘り下げて、自由に考えることは大切なことである。早急な結論を得ず、じっくりと討議を重ねていくことも SCE・Net としては意義のあることではないかと考え地道に着実に活動を重ねている。今後も、教育問題を中心に、会員が種々の問題について自由活発に意見交換のできる場として行きたい。

#### 5. おしまいに

現在までに 50 数回、本格的な研究会活動としては 30 数回の会合からの反省をすることで簡単な教育研究会の動き（記録）のまとめとしたい。

本研究会には公開講座準備会の時期を含めると、多くのメンバー（省略）が出席されたが、2009 年 11 月現在、本研究会に参加しているメンバー（アイウエオ順）は金城徳幸、国友哲之輔、小林浩之、佐久間精一（08 年退会）、渋谷徹、田中貴雄、堂腰典明、堀中新一、松井達郎、溝口忠一、道木英之、山岸千丈、山崎徹、山本彊、弓削耕（世話人）の諸氏である。